

HBウイルス感染者の苦悩

※HBウイルス

=hepatitis B (HBウイルス) 感染によって起こるB型肝炎

近年、AIDSが世界的な問題となっているが、患者の人権、人格は無視され、非人間的な扱いがされてはいないだろうか。私がHBウイルスの問題に取り組んだ頃も、同じような状況にあったと思う。

当時は、HBウイルスの「キャリアー妊婦」を見つけだし、「キャリアー妊婦」から生まれた子どもの追跡調査が主な研究内容であった。感染予防や感染した子の治療法が確立されていない状況での仕事は、多くの問題を抱えたまま進められた。

その頃、HBウイルス抗原陽性者の枕もとの名札には、「Au抗原 (+)」と赤字で記入され、同時に手洗い用の容器、食器はもちろん別扱いとされていた。当時、保健所勤務の看護婦が出産し、見舞いに訪れた同僚がたまたま名札の表示を見たため、その後職場に戻っても、食事やお茶を共にすることができなくなったという。HBウイルスを正しく理解し、指導していかなければならない立場にあった職場でさえ、そんな状態であった。

私たちは、「HB外来」という専門外来を開設し、子どもたちの追跡調査はさらに進められた。多くの母親たちは、治療法の確立を願って、泣いて嫌がるわが子を採血に連れて来てくれた。好意的な協力だったと今でも感謝している。

そんなある日、新聞の片隅に「母が子どもを刺し自殺」という記事が載った。私がアパートまで採血に行った親子であったので、その時のショックは今でも忘れることができない。周囲からどのような扱いをされていたか聞かされていたばかりに・・・。

またこんな例もあった。2時間以上も車に乗って採血に訪ねた先の患者宅。夫は某新聞社の記者だった。

「どうせ治療法はないんでしょう！それならそっとしておいて欲しい」と言う妻。しかし夫は、二人の子どもがこれから就学するという時期だったので、「学校で検診や予防接種など施行される時、どのように対応したらよいか」と冷静にアドバイスを求めてきた。HBウイルスの母児間感染の実態がようやく分かり始めてきた頃であった。

私は、HBウイルス感染の基本となるものは感染予防と信じていたので、知る限りの説明を行った。納得した父親は、嫌がっていた子どもたちを含め、家族全員の採血をさせてくれた。終わってから出されたお茶を何のためらいもなく飲み終えた時「先生は飲まないかと思いました」と言ったその家の奥さんの言葉は、今でも強く心に残っている。

今では、公費でHBウイルス母児感染予防対策がとられているが、治療や予防対策のない問題に取り組む時、医者としてより医学者としての姿勢が当然のここのように出てしまう。いちばん悩んでいる当事者のことなど忘れて・・・。反省ばかりの生活が今も続いている。